

## 現代チベット僧院における仏教教学の現状

### —ゲルク派の教学をめぐる—

高松 宏 寶

(クンチョック・シタル)

0. はじめに

1959年以降、チベット仏教を取り巻く時代背景と社会環境は大きな変化を遂げ、チベット仏教教学にも多大な影響を及ぼすこととなった。その結果、チベット僧院での仏教教学にも大きな変化が生じることとなった。

今回筆者はチベットの僧院における教学などの教義、カリキュラム、メソッドをもとに、ここで考察し論じたい。同時に伝統教学と現代の教学との変化の有無について記す必要を感じ、ここに記したいと思う。

チベット僧院の仏教の学修法については、長期間、集中的に、学問的な側面を非常に重視して行われていることはよく知られているが、近代仏教学とは異なっている。この仏教教学はチベットのみでなく、ヒマラヤ地域やモンゴル、カルムイクやブリヤートなどのロシアでも広く普及し、行われ、実践されている。しかし、1959年にチベットの政治と社会が大きな変貌を遂げ、新しい状況に置かれたことで、僧院への影響も大きく、教学と教育面にも大きな変化をもたらした。

チベット僧院の教学と一口に言っても、ニンマ派、カギユ派、サキヤ派、ゲルク派の四大宗派それぞれの教義、学

び方、メソッドは異なり、多岐にわたっている。

そこで、今回は、まずは現代僧院への「普通学」導入がなぜ行われたかについて触れる必要がある。そして、主にゲルク派における顕密の教学について論じる試みとしたい。顕密についてはゲルク派の「三大学問寺」と言われるガンデン寺、セラ寺、デプン寺などの状況を中心に、密教についてはゲルク派の密教専門道場であるギュトウー寺（上密教学院）、ギユメー寺（下密教学院）のうち、ギュトウー寺の状況を中心に、学問寺の教学と密教の事相について現状を紹介したい。

### 1. 現代教育 (modern education) の導入について

本論に入る前に、ゲルク派に限らず全宗派的に、さまざまな社会状況や社会環境の変化を受けて、チベット仏教の僧院に現代教育を導入しなければならない理由があったことを述べたい。

ダライ・ラマ13世（1876年～1933年）は現代教育導入を検討したが、仏教の伝統的な考え方を持つ保守派の反対により実現せず、1959年まで導入されることはなかった。しかし、同年以降、今日のインドにおけるチベット亡命社会ではさまざまな理由から、現代教育の導入が不可欠となった。主にインドやネパールで生まれ育った亡命チベット人の子どもたちで僧侶になった者たちに対応するためである。伝統的に僧院への入門の年齢は10歳～15歳であるため、若い僧侶にも20歳になるまでは中等教育程度の現代教育が必須だとの声が強まり、南インド、バイラクッパに再建されたセラ寺では1970年代に現代教育を行う僧院付属学校制度が始まった。<sup>1)</sup>

セラ寺に設けられている普通学校は、Sera Jey Secondary School と呼ばれ、インド政府の中等教育中央審議会(The Central Board of Secondary Education/CBSE) に認可された公式学校である。この学校は、チベット僧院における最初の普通学校であり、チベット僧院文化史上初の普通学教育機関である。約700名の学生が学んでいる。

南インド、ムンゴットに再建されたデプン寺でも1980年代に同様の制度が始まり、同じくムンゴットに再建さ

れたガンデン寺も含めて三大寺において僧院として現代教育機関を設けている。ゲルク派以外のすべての宗派も大きな僧院には同様の教育機関が設けられている。また、僧院それぞれの環境や財政状況などによって、僧院が運営する学校、あるいは地域の学校への通学によって若い僧侶に現代教育の機会を与えている場合もある。ちなみに、日本では昭和20年代に時代に合わせた改革が行われた。<sup>3)</sup>

現代教育の導入について検討時には賛否両論があったが、最終的に「普通学」としてチベット語、英語、数学、科学、社会を学ばせることとなった。このような僧侶たちは、日中は近代学校で「普通学」を学び、夜間は寺において経論の暗記や勤行、将来の学問に必要な暗記の準備などをする生活を送ることとなった。

導入の主な目的は、将来学問寺での学修課程を満了した後、社会に出て、仏教の布教、学校の宗教担当教員や、さまざまな仏教伝道団体などの組織の宗教指導者、あるいは亡命社会で文化・宗教担当役人などの役を任される可能性に対応するためである。とりわけ僧院以外の一般学校の教員になるためには、一般的な教育カリキュラムへの知識が必要である。そういった知識が欠けている場合、僧院以外の環境やシステムへの適応は難しい。

また、チベット仏教の僧院などの組織に所属し、学修する僧侶の人数は多い。例えば、南インドのデブン寺は4,000人以上、セラ寺は3,500人近くの僧侶が所属しており、そのうちの多くが僧院の外での活躍の道を探る。1959年以前のチベットとちがいが、これらの僧侶すべてが僧院にとどまるわけではない。そのため、伝統的な仏教の信仰と知識のみでは一般社会に適應するには十分ではないのである。また、僧院の維持管理方法や財政基盤も昔とは違い、現代にはかつてのような莊園も大檀那もないからである。

## 2. 顕教における教学について

ここから学問寺と呼ばれる三大寺において顕教がどのように学ばれるか、どのような学修課程が設けられているかを説明したい。

南インドのデブン寺を一例に僧院の組織形態を見てみると、現在、この僧院にはロセルリン学堂とゴマン学堂の二つの学堂（タツアン）が設けられている。このうちロセルリン学堂は15〜20ほどの学寮（カンツェン）に分かれており、各学寮は多くのシャクツアンから成り立つ。シャクツアンは、主任教授1人、副教授1人、学生3〜10人によって構成される。僧院運営はこのような設置形態で行われており、西洋の大学の形に似ているとも言える。僧院は university、学堂は college、学寮は faculty、シャクツアンは個人研究室に相当すると考えても良いだろう。1959年以前のチベットに在住し、問題点や状況を見聞したイギリス人学者 H. リチャードソンは自分の体験に基づいて以下のように述べている。

「しかし規模の大小にかかわらず、学寮が基本的な単位であった。僧侶になりたいと思う者は、「イギリスの若者が」オックスフォード大学やケンブリッジ大学の学寮に願書を出すように、自分が選んだ学寮の主任教師のもとに出席しなければならぬ。新入りは先輩の僧侶に預けられた。」<sup>4)</sup>

### (1) 五科目の学修

チベット仏教、特にゲルク派の僧院では、五つの主要科目（五論書）を徹底して学ぶ。15〜20年の年月をかけて、「般若学」「中観学」「論理学」「俱舍」「律」を学ぶのである。そして、この学修課程を修了すると、ゲシェー位を受け、密教の学修に入る。なぜゲルク派の宗祖ツォンカバ（1357〜1419）はこれら五科目を学ぶことを規定したのであるか。これについて、ゲルク派で伝統的に認識されている理由がわかりやすく紹介されているので、参考に見てみたい。

「なぜこれらの五つを学ぶのかというと、仏教には大乘と小乗があります。大乘の見方や考え方については、中観を勉強することで知ることができます。大乘の行いを学ぶためには、『般若経』とその註釈、唯識を勉強することで理解できます。つまり、大乘の見方と行いの両方を学ぶことで、大乘がわかるのです。大乘だけではなく、小乗もわ

からなければなりませんから、小乗の見方として『俱舍論』を学び、小乗の行いとして「律部」を学びます。小乗を学ぶには『俱舍論』だけでは十分ではありません。小乗の行いにはいろいろな規則があります。(略)その二つを学んだら小乗が全部わかる。これらはすべて論理的に学ばなければならぬ。そのための基礎として、ダルマキールティの『プラマーナ・ヴァールテイカ』を学ぶのです。このように五つの領域を学ぶと、顕教の仏教が全部わかります。』<sup>5)</sup>

以上のように、学ぶべき科目が上記の五科目であるのは、「般若学」により般若経や唯識思想を学ぶことによって大乘仏教の実践たる行を理解し、「中観学」によってすべての思想哲学の最高の見解である中観思想を理解し、「論理学」によってインド由来の論理を体得するためであり、「俱舍」によって小乗の思想を理解し、「律」によって仏教の実践要素たる戒律を理解するためである。

チベット仏教の教学では、中観思想、特に中観辯論証派の思想を仏教思想の頂点に位置付けている。また、説一切有部の戒律の流れが現在まで守り実践されており、チベット仏教の出家者はいわゆる小乗仏教の戒律にもとづいて受戒し、戒を実践し守っている。

これら五科目は学問的に口頭問答形式で学ばれる。10世紀のインド、ナーレンダ僧院の学修システムにさかのぼることは間違いなく、教義やメソッドもナーレンダ僧院に由来する。この学修課程を15年で終えるか、20年近くかかるかは、個人によって異なる。ちなみに、これらの教義や学修内容は、日本の奈良時代における仏教に似ているのではないだろうか。

### ①五科目の準備の学修

五科目を学ぶ前の必須条件として、基礎的論理学である三科目を学ぶ。三科目は「ドゥータ(存在論)」「タクリク(入門的論理学)」「ローリク(認識論)」である。「ドゥータ」は仏教のさまざまなことばに基づく概念を習得すると

同時に、論理的思考の訓練でもあり、「リクラム・チャクパ（口頭問答入門）」の形式的論理パターンに慣れ親しませるためである。これら三科目は、ゲルク派とサキャ派において仏教の教学の修得のための重要なメソロジー（方法論）として選ばれた。これについては西洋の研究者たちも注目し、多くの論文で扱われているわけだが、チベット人の仏教教学の大きな特長となっている。

「ドゥータ」は論理的考察のスキルを発達させるツールとして考えられている。<sup>(6)</sup>

「タクリク」はインド論理学の入門であり、因の三相の論理形式をマスターする。

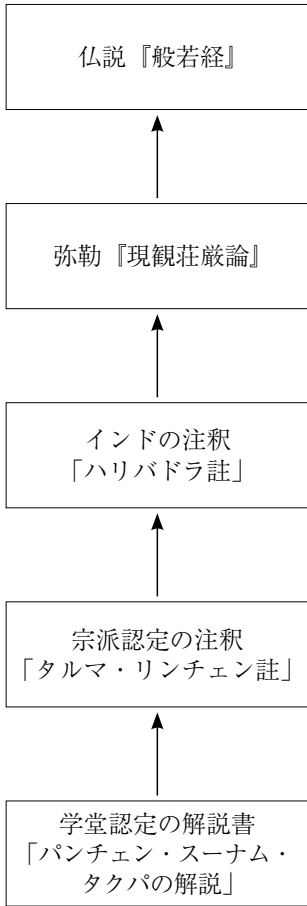
「ローリク」は、論理学の論理性を認識させることができ、認識構造の入門的要素であると同時に、「般若学」と「中観学」の学修時にその実践に大きな影響を与える。

また、近代仏教論理学者であるドイツ人 Steinkelner, E は「この三科目の学修システムは、歴史的にはチベットで13世紀前半に始まった。チベットの学者たちがより明確な論理と認識論を求めたのは宗教の学修の根本的手段としてであった。(Around the beginning of the 13th century, Tibetan scholars start to acknowledge more obvious logic and epistemology as a fundamental part of religious study.)」<sup>(7)</sup>と述べている。

学僧たちはこれを思考の訓練であると考えている。大乘仏教は、思想的かつ哲学的であることを認識し、それを身につけるために、学問に入る前に思考を訓練するパターンである。現在では、ニンマ派、カギユ派の僧院でも口頭問答を取り入れられている。これは、説明能力やさまざまな角度からの視点などを訓練する良い方法であり、導入によるメリットが多い。

## ②実際の学修方法

さて、現在行われている五科目の学修方法について、デブン寺ロセルリン学堂の場合を一例として見てみたい。



五科目の第一である「般若学」課程では、般若経の註釈である『現観莊嚴論』を中心的なテキストとして学んでいくが、まずは弥勒造『現観莊嚴論』の根本偈を正確に暗記し、続いて、教あるインド撰述の注釈書のなかでもハリバドラ（獅子賢）による注釈書を一言一句正しいと評価し、暗記する。この二つの論書をしっかりと暗記し、暗誦できるようにになったら、ツォンカバの直弟子タルマ・リンチェン（1364～1432）による註釈によって学び、さらに難解な点についてはロセルリン学堂の教学体系を確立したパンチェン・スーナム・タクパ（1478～1554）の解説によって学ぶ。すなわち、左の図のように、インドの論書をもとに学び、難解な点については宗祖または宗祖に近い註釈によって、さらに難解な点については、各僧院あるいは各学堂で解説書として認定したテキストによって学ぶのである。これはどの学堂でも同様であり、同時に他の科目（論書）の場合にもあてはまる。日本における仏教教学や現代仏教学とは異なる学び方であろう。チベットの学問では、仏説たる經典そのものより、論書を学ぶ習慣である。仏陀が対機説法をなさったという理由から、仏説はいろいろな次元での解釈ができ、読むことができるため、誤った解釈を避けるために、インドでの解釈を基準とするこのような伝統がある。なお、ロセルリン学堂では「般若学」課程の学修期間は5年間である。

僧侶の一日を見てみると、一つのテキストを暗記する時間、内容について自習する時間、師（先生）の講義を受ける時間、問答の練習をする時間の大きく四つの時間帯に分かれ、これらに加え、朝夕の勤行に参加する時間帯がある。また、年に1、2回、「タムチャ（主張を立てる）」と呼ばれる大きな口頭問答試験が行われる。「タムチャ」とは大学の研究発表に相当する。自分の理解や疑問に感じることを問答形式で述べ、命題を提示する。これに対して、一人あるいは数人が反論し、命題提示者の論理の整合性をつき、主張を崩そうとする。命題提示者は、相手の反応を見て、さらに自分の主張を示すのである。

「各学堂の試験は、春の大法会の際に行われます。タムチャ堅義者たちは、かの五冊の書物から五問ずつ出題された問題に対しておたがいが問者 (snga rgo)・答者 (dnyi rgo) となって論争を交わすのです。ここでの問答もまた経証 (lung) と論証 (rigs) によつてなされます。」<sup>9)</sup>

また、「タムチャ」の様子は以下のようなものである。

「タムチャ堅義 (dam bca)」とは、学僧が自分のクラスで学んだことについて、十分習得しているのだ、ということをもつて証明するために主張を立てることです。したがって、タムチャ堅義者とは、タムチャという主張を持っていて、それに対する質問に答える者、といえます。質問者は、その主張の真意を確かめるためにタムチャ堅義者に質問を出します。その質問者のクラスの者たちはタムチャ堅義者の右側に、そして彼（タムチャ堅義者）のクラスの仲間たちは左側にそれぞれ控えます。」<sup>9)</sup>

「ガクシャー・ポンスム（相手の問題ある主張を否定し、自分が正しいと思う主張を発表し、二つの結果によって疑問を解決する）」は、「般若学」「中観学」「俱舍」などすべての問答においてあてはまる。このテクニクを具体化する問答マニュアルであるのみならず、ほとんどのチベットの註釈が、哲学を説明する主要な手段として、この中心のトピックスへの三つのアプローチ方式を用いていると考えられている。<sup>10)</sup>

前述のとおり、この基礎的論理学三科目は、サキャ派とゲルク派における伝統的教學システムであり、かつても今



もこの学修課程は継続されている。現代においても必要とされている科目であると言える。

五科目の第二である「中観学」はチャンドラキールティ(月称)の『入中論』『入中論自註』をツォンカパの註釈『密意解明(ゴンパ・ラプセル)』によって、2年程度問答形式で学ぶ。その際には、ツォンカパの『中論』註や『四百論』註を参考文献とし、パンチェン・スーナム・タクパの解説によって学ぶのである。

第三の「俱舍」はバスバンドウ(世親)の『阿毘達磨俱舍論』とダライ・ラマ1世ゲンドウン・トウパ(1391~1471)やチベットの学僧チム・ジャンペルヤン(11世紀)の注釈に依って3年間学ぶ。

第四の「律」は2~3年程度学ぶ。最低2年間の学修が必要であるが、学修期間に幅があるのは、ゲシェー位の試験を待つ間は「律」課程に出席し続けるからである。

そして、第五の「論理学」はダルマキールティ(法称)の『量評釈(プラマーナ・ヴァールティカ)』を中心にインドやチベットの註釈に依って、「般若学」と「中観学」を学ぶ数年間のうち毎年2~3か月の期間においてセミナー形式で学ぶ。

以上の学修課程を終え、学問を終えたなら、各自の能力にあわせたゲシェー位を受ける。なお、ゲシェー位を受けるまでの学修課程については、小野田俊蔵<sup>(1)</sup>ならびにツルタイム・ケサン<sup>(2)</sup>それぞれの論文において詳しい。

ゲシェー位の最高峰はゲシェー・ララムパ(Geshe lha ram pa)である。かつてはゲシェー試験はすべて口頭問答であり、1959年以前には筆記論述試験はなく、タムチャによる口頭問答試験によってのみその能力を認められた。しかし、現代のチベット亡命社会のインドに再建された僧院では、さまざまな理由によって1974年ごろより口頭問答試験を受ける前に6年かけて五科目の筆記論述試験である「ゲルク派大試験(ゲルク・ギユクトウ・チェンモ)」と呼ばれる試験を通過することが重視されている。論文ではないが、筆記試験である。<sup>(3)</sup>

## (2) 筆記論述試験の導入

「ゲルク派大試験」は慎重に検討を重ねた結果の、それ以前の問題を改善するために設けられた試験である。チベットの僧院が近代にふさわしい学修方法を模索した結果、たどり着いた試験だと言える。現代の教育・学習においては、筆記による学習や試験がなければ、不十分であるとされ、ゲシェー・ララムパ位の授与にあたっては、口頭問答試験に加えて、筆記による論述試験が設けられた。

## ① 伝統的学修システムの問題点

19世紀後半から20世紀前半において既に、三大寺での学修方法には問題が多いことが明らかになっていた。

「ほとんどの僧院では、規模の大小にかかわらず、約半数の僧侶が「学者」であったが、この言葉は今日の西洋でいう学者スカラーとはだいぶ意味が異なっている。その履修科目は、先に列挙したような(三三〇頁)、大蔵經に収録された顕教の文献を学ぶ五教科であり、この後で密教の専修課程に入る者もいた。ゲルク派の大きな施設、特にラサ三大僧院とタシルンポ僧院では、もっぱら丸暗記に重点が置かれ、書くこととノートを取ることは、実際に禁じられないまでも、好ましくないとされていた。習字とチベット作文の学習は書記と役人がやることであり、そのため真の宗教的知識の獲得にはまったく有害であるとみなされていた。」<sup>14)</sup>

「試験は初めから終わりまで口頭で行われ、定式化された問答の形を取った。合格するためには、教理とそれに関連したテキストの両方について、該博な知識を披露しなければならない。かれらはそのテキストから正確に一語一句過たずに引用した。長年にわたる養成課程の間に、かれらはかなりの量の聖典を暗記したことだろう。(略) こうした高度に熟練した「学者」たちの中に、読みは実に達者だが、自分の名前さえ満足に書けない者がいたらしい。」<sup>15)</sup>

「必然的に、この種の教育は完全に僧院の仕事であり、俗人にはとうていあずかり知ることのできないものであった。チベットの歴史や伝記文学を読むことさえ、僧院のカリキュラムには含まれていなかった。その種の読書は、事実上、教養のある貴族と役人のためだけのものとなった。このようなわけだから、亡命チベット人にとって、二十世紀という状況の中で教育を行う能力と資格をもった教師をにわかには育成することがいかに難しいかは、想像にかたくないのである。かれらは突如として現代というものと折り合いをつけることを、否応なく強いられたのだから」<sup>16)</sup>

現在の大試験は6年間をかけて修了する。ゲシエー・ララムパになるには、3段階がある。

最初の2年間の「カーラムパ (dka' ram pa) の試験 (カーラムペー・ギユクトウ)」は、5科目から出題される筆記6試験と、文化と仏教史から出題される筆記3試験の合計9つの筆記論述試験と、5科目についての5つの口頭問答試験に合格する必要がある。このレベルに合格した者はゲシエー・カーラムパ位を受ける。

続く2年間の「阿闍梨の試験 (ロツペンキ・ギユクトウ)」は、5科目から出題される筆記6試験と、5種類の口頭問答試験に合格する必要がある。このレベルに合格した者は阿闍梨 (ロツペン) 位を受ける。

そしてさらに続く2年間の「ララムパの試験 (ララムペー・ギユクトウ)」は、5科目の口頭問答試験に合格することで、ゲシエー・ララムパ位を受ける。

このように頭教についてすべてマスターしたゲシエー・ララムパは、この後密教を学ぶために密教専門道場に入る資格を得たことになる。これこそ、伝統的にはなかった、新しい学修システムである。

ちなみに、ララムバやカーラムパなどの「ラムパ」とは、「ラプジャムパ (rab 'byams pa)」すなわち完全に会得した者を意味する尊称が「ラム」と縮められたものである。

北インド、ダラムサラに再建されたチベット図書館の高名な教師であるソナム・リンチェンはインタビューに答えて、「ゲルク派大試験」について以下のように述べている。

「かつてのチベットでは、口頭問答試験が主な技能であり、基準であった。僧侶たちは自立するために、そのよう

な試験を通じて、さまざまな側面からさまざまなレベルで、高僧たちの集まりにおいて仏教のさまざまなテーマについて検討のうえ、ゲシエー位を与えられた。現在は筆記論述試験のために長い準備期間を与えられ、同時に口頭問答のポイントを含めて、ゲシエー試験のプログラムにおいてアセスメント(査定)のための要点となっている。<sup>①7</sup>

### 3. 密教における教学について

以上の顕教の学修課程を修了し、ゲシエー位を得た者、特にゲシエー・ララムからは密教専門道場に入り、そこで密教の事相の学修を開始する。

前述のとおり、ゲルク派における最高格式の密教専門道場はギウトゥー寺、ギユメー寺などである。両寺における主なテーマは、後期密教すなわち、無上瑜伽タントラの「秘密集会(グヒヤサマージャ)タントラ」、「最勝楽(チャクラ・サンヴァラ)タントラ」、「金剛怖畏(ヴァジュラ・バイラヴァ)タントラ」というゲルク派の三大タントラや「時輪(カーラチャクラ)タントラ」などの経論の学修で、実践的に行に基づいて事相を学ぶ。これらの寺に入門したゲシエーは最低1年程度、無上瑜伽タントラを中心に密教教理を学ぶが、その中でも優秀なゲシエー・ララムはこれらの密教専門道場の副僧院長(ラマ・ウンゼー)や僧院長(ケンポ)として6年間務め、大阿闍梨となる。これらの大阿闍梨の最長老がガンデン・ティパ(ガンデン座主)すなわちゲルク派管長に就任することになる。その意味で、ガンデン・ティパは、ゲルク派の僧院での学修に最も成功した者であり、期待される者でもある。チベットには「人の子に教育があれば、ガンデン・ティパは誰のものでもある」という諺がある。すなわち、生まれなどに関係なく、顕密の学問と修行に秀でた者こそがガンデン・ティパになれることを意味し、学修の機会が開かれていることを示している。

それでは、ギウトゥー寺を例に密教の学修課程について説明していこう。

ギウトゥー寺は、ツォンカバの孫弟子クンガー・トウンドプ(1419～1486)が1474年チベット・ラ

サに建立した密教専門道場である。チベット本土での宗教活動が非常に困難になっている現在、北インド、ドラムサラに再建されたギュトウー寺において、その伝統が継承されており、500人ほどの僧侶が所属している。

他のチベット仏教僧院と同様に、同寺では「三輪（コロロ・スム）を離れず」を信条にしている。三輪とは「学修（ロクパ）として聞思し、捨てるもの（ポンパ）として禅定により煩惱を捨て、行うもの（チャワ）として利他的活動や信者のための法要・儀式を行う」の3つである。

しかし、ギュトウー寺の僧侶のすべてが学問寺での学修課程を修了している者だとは限らない。若いとき（幼いとき）に最初からギュトウー寺に入門する者も多い。

彼らはギュトウー寺の伝統を継承し、寺を維持していく役割を担うため、ギュトウー寺流の儀軌や典籍を学び、暗記することで、法要や儀礼、儀式に関するすべての文献を暗記し、事相を守るのである。彼らは声明や砂曼茶羅などの技能に熟練し、密教法儀の実際の運営を支えており、キエーリムパ (*bskyed rim pa*) と呼ばれる。<sup>18)</sup>

#### (1) キエーリムパの学修

キエーリムパの学修課程は7科目から成り、5、6年かけて学び、合計700ページ近い、7つのテキストを暗記する。学修課程は大きく4つの分野に分けられる。

① 秘密集会タントラの根本タントラ、最勝楽タントラの第一品、三大タントラの成就法や我生起（ダツケー）儀軌、灌頂次第、護法尊への供養儀軌を暗記し、法要を行う。

② 密教法要の声明や楽器（ドルジュ（金剛杵）、ティルプ（金剛鈴）、ギャリン（中笛）、ダウンチェン（大笛）、ドゥンカル（法螺貝）、ブクチャ（鉞）など）の演奏法などを身につける。

③ 曼荼羅の描き方、立体曼荼羅の作り方、護摩壇の作り方を身につける。曼荼羅儀軌に出てくるトルマ供養などや印相、密教的象徴を知り、マスターする。

④四事業の護摩法、護摩の材ならびに灌頂次第、ギウトウ寺流の祈願大祭の飾り方や莊嚴の作り方をマスターする。以上の学修の後キエーリムバ位を得る。若く能力のある者はさらにガクラムパの学修に進む。

## (2) ガクラムパの学修

キエーリムパから「ガクラムパ (ngags ram pa)」になる人のためには、9級の学修課程が設けられている。<sup>19)</sup> ガクラムパは1990年代にダライ・ラマ14世法王の提案をうけて、設けられた。かつて、キエーリムバや密教だけの専門家など、ゲシェー・ラムパ以外の人たちは顕教の学修をしていなかった。しかし、キエーリムパらも僧院外の社会に出ることもある。また、仏教を思想的に説明するためにも、密教の根本である大乘仏教を客観的に説明するためにも、顕教の学習が不可欠となり、ギウトウ寺でもある程度顕教を学ぶようになったのである。このように、現在のギウトウ寺の学修課程のすべてが伝統的なシステムなわけではない。

現代において、密教の事相を教理的に論理的に説明することが求められた結果、インドのチベット亡命社会において新たに設置された、ガクラムパの学修課程について見てみよう。<sup>20)</sup>

ガクラムパは、キエーリムパ同様、同寺を維持し、継承する役割を担い、僧院の行事を自立的に運営するための勉強を行う。

現在行われているガクラムパの学修課程は、以下のとおりである。

第1級では、「ドゥータ」と波羅提木叉を教科書によって学ぶ。

第2級では、「ローリク」、「タクリク」、さらに菩薩戒を学ぶ。

第3級では、ダルマキールティの『量評釈』第一品・第二品を学ぶとともに、ツォンカバによって無上瑜伽タントラの最高峰に位置づけられる秘密集会タントラに基づく「三身修道」、そして三昧耶戒(密教の戒律)を学ぶ。

第4級では、チャンキヤ・ルルペー・ドルジェ(1717〜1786)の『宗義解説(ドゥプタ・ナムシャー)』

で古代インド思想と説一切有部の思想を学ぶとともに、密教における五道十地（サラム）を学ぶ。

第5級では、同じく『宗義解説』で唯識派の思想を学ぶとともに、秘密集会タントラの生起次第（キェーリム）の実践をパンチェン・スーナム・タクパ『秘密集会生起次第解説・智慧者の魅惑』に基づいて学ぶ。

第6級では、同じく『宗義解説』で中観派の思想を学ぶとともに、秘密集会タントラの究竟次第（ヅクリム）の実践をパンチェン・スーナム・タクパ『秘密集会究竟次第解説・智慧者の魅惑』に基づいて学ぶ。

第7級では、ツォンカパの『菩提道次第広論（ラムリム・チェンモ）』『菩提道次第略論（ラムリム・チュンワ）』両著の「観（ハクトン）の章」における「否定対象の認識」を学ぶとともに、金剛怖畏タントラの生起次第と究竟次第を学ぶ。

第8級では、上記の「観の章」における「中観帰謬論証派と中観自立論証派の相違点」を学ぶとともに、最勝樂タントラの生起次第と究竟次第を学ぶ。

そして、最終級である第9級では、シャーンティデーヴァ（寂天）の『入菩薩行論（ボーデイサットヴァチャリヤーヴァターラ）』をタルマ・リンチェンによる注釈によって学ぶとともに、ツォンカパの『真言道次第広論（ガクリム・チェンモ）』における所作タントラ・行タントラ・瑜伽タントラを学ぶ。

さらに、『真言道次第広論』全文を字義とおりに理解する。以上のように、密教の教理、大乘思想、そして、論理学などを時間をかけて習得することが不可欠だと考えられている。

各級の修了に際しては、筆記論述と口頭問答の両試験に合格する必要があるが、彼らはギユトウー寺の各種行事に必ず参加することが求められるので、連日、法要などに参列しつつ、上記のカリキュラムで学ぶのである。

上記の学修課程を修了し、最終試験に合格した者はガクラムパと呼ばれる。ガクラムパとは「密教を完全に会得した者」すなわち密教専門家を意味する。

## (3) ゲシエー・ガクラムパの学修

一方、ゲシエー・ガクラムパは、南インドに再建された三大寺（ガンデン寺、セラ寺、デブン寺）にて口頭問答試験と「ゲルク派大試験」の両方に合格し、ゲシエー・ララムパ位を得た上で、ギウトウー寺またはギユメー寺に入った人たちである。彼らは1年にわたって寺の行事に参加する一方、自分で選択した科目を学んだ後、一日寺を離れる。寺に在住せずに、自らの選択科目を自身で学ぶのである。

学修科目は、ゲルク派三大タントラの根本注釈、ナーガールジュナ（龍樹）『菩提心釈（ボーディチツタヴィヴァラナ）』、チャンドラキールティ『灯作明（プラディーポードヨータナ）』、ツォンカバ『五次第明灯』、ケートゥプ・ゲレク・ペルサンボ（1385～1438）『秘密集会生起次第・悉地大海』、シエーラプ・センゲ（～1445）『灯作明解説』、クンガー・トゥンドゥプによる秘密集会タントラ注釈、パンチェン・スーナム・タクパ『秘密集会生起次第解説・智慧者の魅惑』などの秘密集会タントラの生起次第・究竟次第の解説のテキストを学び、自習する。その後、寺での試験を受け合格したら、再びその寺に戻り、前述のとおり同寺のラマ・ウンゼーとケンボを歴任することとなる。密教専門道場の僧院長経験者は、将来ガンデン・テイパになる資格を得る。

チベット仏教ゲルク派の密教学修システムは極めて複雑であり、かつ、日本で発表された論文等ではほとんど触れられていないため、わかりやすい説明は困難だが、ゲルク派の密教学修の現状を紹介することに意義があると考え、ここに紹介した。

## 4. まとめとして

今回、日本の真言学の教学の再考をきっかけとして、筆者は伝統的チベット僧院での仏教学の現状についての簡単な紹介を試みた。



一般にチベット仏教の伝統教学では、僧侶たちは生涯をかけて、精力を注いで集中的に大乘仏教と密教の学派について学ぶことはよく知られている。これは現代日本や近代仏教学における仏教研究や教学とは異なる部分に力点が置かれており、異なる方向性を持つものであることは明らかである。しかし、チベットの僧院における仏教教学も、現代の仏教学研究と無関係ではいられない。

1959年から今日まで、チベット僧院の教育は、さまざまな事情により「普通学」を導入すると同時に、伝統的仏教の学問については学問のシステムを維持しながら、メソッドについては筆記論述試験導入や密教専門道場での顕教共通学修課程導入などによって、大きく変化してきた。これからも社会の変化に応じて、僧院や密教専門道場のカリキュラムや教学、教義においても改善をはかっていくことが望ましい。

なお、今回筆者が紹介したのは、ゲルク派の三大寺と密教専門道場ギュトウ寺についてのみである。カギユ派やニンマ派には異なるメソッド、メソロジー、カリキュラムがある。今後はそれらについても研究し、論じたいと考えている。

〈キーワード〉 チベット仏教の教学、チベット僧院の仏教学、チベット密教の学修、ゲルク派の教学

註

- (1) [www.setrajevmonastery.org/secondary-school](http://www.setrajevmonastery.org/secondary-school) (2014年2月1日)
- (2) [www.joselinmonastery.org/index.php?id=2014](http://www.joselinmonastery.org/index.php?id=2014)年2月1日)
- (3) 阿部(平成24年) Pp.201-221
- (4) 奥山訳 (1998). Pp.321-322
- (5) シルティム (2012). P.20
- (6) Cf. Sitnar K., (2008). P.31.
- (7) Cf. Steinkeller E., (1987). P.278.
- (8) シルティム (2012). P.34.

- (9) シルネーム (2012). Pp.29-30
- (10) Daniel Perdue remarks in his work that “ it is not only the debate manual which incorporates this technique, but most of the Tibetan commentaries use this format of the three approaches to a central topics as a principal means of explaining philosophy”. Perdue E.D. (1992). P.850
- (11) 小野田 (1989). Pp.352-371.
- (12) <http://www.tibetpost.com/en/news/exile/2021-2011-gelugpa-university-exams-conclude-at-drepung-loseling> (2014年2月1日)
- (13) [http://www.berzinarchives.com/web/en/archives/study/history\\_buddhism/buddhism\\_tibet/gelug/overview\\_gelug\\_monastic\\_education.html](http://www.berzinarchives.com/web/en/archives/study/history_buddhism/buddhism_tibet/gelug/overview_gelug_monastic_education.html) (2014年2月1日)
- (14) 奥山訳 (1998). Pp.321-322.
- (15) 奥山訳 (1998). P.333.
- (16) 奥山訳 (1998). P.324.
- (17) Tandzin (2004). P.46
- (18) [www.gyuto.org/index.php/curriculum/practice-teachings](http://www.gyuto.org/index.php/curriculum/practice-teachings) (2014年2月1日)
- (19) Chos 'byung Utpalal'i do shal (2001). p.259-261.
- (20) [www.gyuto.org/index.php/curriculum](http://www.gyuto.org/index.php/curriculum) (2014年2月1日)

参考文献

- chos 'byung Utpalal'i do shal : gSang chen rig 'dzin sde chen po dpal ldan stod rgyud grwa tshang gi chos 'byung Autpal'i do shal zhes bya ba//. Gyuto Monastery. Dharamsala, 2001. (キルネーム寺の現代史)
- 阿部 (平成24年) : 「明治期における真言宗の教育カリキュラム」『阿部貴子『現代密教』智山出版社 第24号、平成24年
- 奥山訳 (1989) : 『チベット文化史』奥山直司訳、春秋社、1989.
- 小野田 (1989) : 「チベット学問寺」小野田俊蔵『チベット仏教』岩波講座・東洋思想第11巻、1989.
- 小野田 (1985) : 「bsDus grwa 学僧のゴッソ」『印度学仏教学研究』27 (一). Pp.196-197, 1978-12. 日本印度学仏教学会、インデ学仏教学研究、第13号
- Perdue E.D. (1992) : The DEPATE in Tibetan Buddhism.Snow Lion Publication, New York, 1992.
- Sithar K. (2008) : "Introduction to Tibetan bsDus Grwa Logic". Kunchock Sithar. The Tibet Journal XXXIII, No.1, Library of Tibetan Works and Archives. Dharamsala, 2008.
- シタル・ユ (高松) : 「チベット亡命社会における仏教の近代化」 Pp.175-195.『現代密教』智山伝法院、第22号、平成23年
- Steinkeller E. (1987) : "Tshad mai skyes bu - Meaning and Historical Significance of the Term", Contribution to the Tibetan History and Language, 1987.
- Tachikawa M. (1971) : "A sixth century Manual of Indian logic". JIP, Vol.1, No.2, 1971.

- Tandzin E.W. (2004) : "Ecclesiastical Rule- Relinquishment in Exile ?", by Eeling Wong Tandzin, The Tibet Journal, Library of Tibetan Works and Archives, Dharamsala, 2004.
- Van de Kuip LWJ : "Contribution to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology"- from the 11th to the 13th century. Seminar fur culture Geschichte Indien ander Universitar Hamburg, Wiesbaden, 1983.